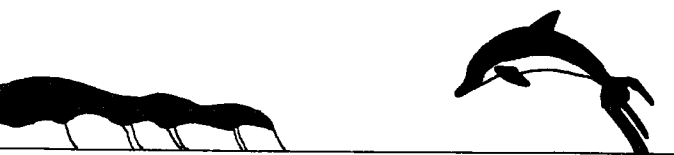


杜夫全集——11



どくとるマンボウ航海記 南太平洋ひるね旅

北杜夫全集 — 11



新潮社版

どくとるマンボウ^{こうかい}航海記・^{みなみたいへいよう}南太平洋^{たび}ひるね旅



〈北杜夫全集11〉

一九七六年二月二五日 発行
一九七七年二月一五日 二刷

定価一〇〇〇円

著者 北^{きた} 杜^も 夫^お

発行者 佐藤 亮 一

発行所 株式 新 潮 社

東京都新宿区矢来町七一(〒一六二)
電話 業務部 東京(〇三)二六六一五一一
編集部 東京(〇三)二六六一五四一一
振替 東京 四一八〇八番

印刷 株式会社 光邦

製本 大口製本株式会社

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小
社通信係宛御送付下さい。送料小
社負担にてお取替えいたします。

目次

どくとるマンボウ航海記	5
南太平洋ひるね旅	135
『あくびノオト』より	253
初出と収録	321

どくとるマンボウ航海記・南太平洋ひるね旅

どくとるマンボウ航海記

目次

私はなぜ船に乗ったか	7	霧ふかいアントワープ	79
これが海だ	12	パリの床屋教授どの	84
飛ぶ魚、潜る人	18	わが予言、崩壊す	94
シンガポールさまさま	23	ゴマンとある名画のことなど	98
マラッカ海峡からインド洋へ	31	盲腸とアレキサンドリア	107
タカリ、愛国者たむろするスエズ	39	海には数々の魔物が棲む	112
ドクトル、閑中忙あり	47	本の話から船乗りのこと	117
アフリカ沖にマグロを追う	53	コロンボのカレー料理	122
ポルトガルの古い港で	59	帰ってきた燕とマンボウ	127
ドイツでは神妙に、そしてまた	66	あとがき	133
小雪ふるエラスムスの街	73		

私はなぜ船に乗ったか

マダガスカル島にはアタオコロイノナという神さまみたいなものがあるが、これは土人の言葉で「何だか変てこりんなもの」というくらいの意味である。私の友人にはこのアタオコロイノナの息吹きのかかったにちがいない男がかなりいる。一人は忍術を修行しようとして壁に駆けのぼり、墜落して尾椎骨にヒビをいらした。一人はリングを三十八個むさぼり食って自殺を企てた。一人は学者としておとなしく講義でもしていればいいのに、スパイになりたくて汲汲としている。こういう連中がいなかったなら、私は船になんぞ乗らなかつたかも知れない。

先年、私はドイツ国に渡ろうと思い、まず神妙に留学生試験を受けたところ、文部省当局は私を書類選考でふり落した。私はフンガイし、それならば選考委員をだまぐらかすため節を屈して論文のひとつも書くかと思案していたところ、Mという男が私に知恵をつけてくれた。

Mは私の勤務している医局の先輩で、ちょうどニューヨークの或る病院に一年勤めて帰ってきたばかりだったが、これは彼の初志に反すること、本当はもっと世界を放浪するつもりだったらしい。渡米前、彼は研究室にこもりガラス管をいろんなふうにひんまげ、一方の端にさした煙草の煙がフラスコに満ちた水中をくぐる装置を作りあげた。彼がいうには、これぞ中国伝来の水煙草であり、肺癌におびえるアメリカ人は争ってこれを購うであらう。そして一心不乱にボコボコ音を立てながら一日じゅう煙草をふかして実験している光景はたしかに一見に価するものであった。彼が一年くらいで帰ってきてしまったのは、この苦心の水煙草の装置が予期に反して少しも売れなかったためであるらしい。そのMが私にこう言った。

「あんた、船医になったらどうだ？　そうして、向こうに着いたらスタコラ逃げちまうんだ」

それは天才的な考えだ、と私は言った。ぜひそうしよう。しかし君は向こうに行っても研究なんぞする気はないのだらう、と彼が訊いた。どうするつもりだね？

精神薄弱児施設に手紙を出してあるんだ、と私は言った。そういう相手ならきつと僕に親近感を抱くだろうからね。

なんとという頭の良さだ、と彼はうなった。

そこで私は、すっかりこの計画に満足し、早速ノコノコ

或る船会社に出かけて行った。

ところが敵もサルモノである。応対にでた係長は、私が船は未経験だから試しに一航海乗せてもらえないかと述べると、それでは困る、なにしろ見物が目当てですぐやめてしまふ医者ばかり多いので、当方としては最低三年の契約をして貰わねば、とまるでこちらの魂胆を見すかしたような話であつた。そのでつぷりした係長は、契約という言葉をかめしく何遍も使用した。話を聞きながら私は、たいへん駆足の苦手な私がどこか見知らぬ異国の波止場を一生懸命ドタバタと逃げてゆき、この肥満した男が片手に契約書をふりかざして凄じい勢いで追っかけてくる幻想に悩まされた。あまつさえこの係長は、私が自分は神経科の医者なので手術は苦手だと本音をもらすと、うちは貨物船が多いですから荷下ろしのときなど怪我人が多い、指がちょんぎれる、足がちょんぎれる、頭が割れてしまふのまでであるなどと私をおびやかしてさえたのである。

そんなことがあつてから、去年の十一月になつて全く唐突に、水産庁の漁業調査船が船医を捜しているという話があった。その船は大西洋でマグロの新漁場開拓を行ない、欧州をまわつて帰ってくる予定だが、もう数日後の出港で、まだ医者が見つからない。何科の医者でもいい、インターン生でもかまわぬという。なにぶんあまり突然の話ではあ

り、しかも一日二日のうちに決めなければならないのだから、正直のところ私も躊躇した。私にしたつて勤めは持っているし丸っきりの風来坊ではないからである。ところがMをはじめいろんな連中が面白がつて私をたきつけた。これだけ寄航地の多い船にはすぐ乗れるものじゃない、逃げる逃げないは別として、まあ今度はブラリとあちこち下見をしてきたらいい、それにマグロがたらふく食えるじゃないか。たしかにその船は、シンガポール、スエズ、リスボン、ハンブルク、ロッテルダム、アントワープ、ル・アーヴル、ジェノヴァ、アレキサンドリア、コロンボと寄る予定で、いささかの見物はできそうである。

水産庁に電話をしてみると、向こうでは大喜びで、実は乗ることになつてゐた医者が都合でやめてしまつた、ようやくやはり神経科の医者を探したところ医局の許可がおりずこれもダメになつてしまつた、そんなことでもう半月も予定がのびているが、これ以上はのばせないからドクターなしで出港しようと考えていたところだという。結局私は自分でも半ばアッケにとられてゐるうちに、なんとなく乗ることに決めてしまつたようだ。私のいる医局では翌春教主主催の学会をやることになつており、果して許可してくれるかどうか危ぶんでいたところ、教授は人間を見る目を持っている人で私のことはすっかり諦めていたらしく、

意外に簡単にオーケーになった。なにしろ私はもう何年も医局にいるくせに論文一つ書こうとはしないのである。医局にしていると大抵心理とか病理とかの研究室に配属され、いやでも共同研究が何か押しつけられてしまうものだが、私はそんなものを命じられぬよう、小部屋の一隅に『宇宙精神医学研究室』なる看板をかがけ、自らその主任と称し、そこに隠れて空とぶ円盤の書物なんぞばかり読んでいたのである。

その他の障害も案外スムーズに片がつき、いよいよ船に乗りこむことに決定してしまつたとき、私はかえって慌てだした。出港まであと三日しかないのである。私は、いくらなんでもこつちだつて準備があるからせめて二、三日出港を延ばして貰えぬかと交渉したが、これがてんでダメであつた。ゆつくり考えられて又ぞろやめたいなどと言いだされてはかなわぬと役所でも考えたのかも知れない。

ところで照洋丸というその船の大ききさであるが、最初私が聞いたときは八〇〇トンばかりとのことであつた。これはちつとばかり小さいなと思つていると、水産庁の役人の話ではそれが七〇〇トンとなり、船長の話では六一〇トンとなり、役所で貰つたパンフレットによると六〇二トン九五と書いてある。どうも段々と小さくなる。このぶんではいざ実物を見るときにはボンボン蒸気くらいに縮小してし

まいそうである。

しかし船を見に東京湾まで行くと、照洋丸は白く塗られたなかなか瀟洒な船で、ちゃんと鉄でできていた。もっともさすがに大きくはなく、翌日出港するという宗谷の傍を通つたときはそれが小山のように巨大に見えた。医務室もなかなか完備しているが、船医の居室には正直のところガツカリした。いくら狭くても個室が貰えるものと思つていたのに、二段ベッドの二人部屋だつたからである。幸いなことに、同室の三等航海士は、ときにフカのごとき不気味な目つきで人を睨む悪癖を有するほか、極めて気持のいい男であつたのは悪魔のハカライというべきで、海上では船が全世界であり、個人の世界は居室だけに限られるから、万一カンシヤクもちでネゴトもちでヤブニラミでキンキラ声の、かつ大ボラフキでオセツカイでカサツカキでダツチヨウの男なぞと一緒になつた日には、そのユウツさは比類ないものであらう。もっとも贅沢は言えぬので、士官を除いた一般船員はみんな船底の大部屋であり、ここでは個人的生活はわずかにカーテンをおろした寝棚ひとつの面積に限られている。

さて、それからの三日間というものの、怠惰なる私にとつてはまさに世界の終末がきたかと思われた。なにしろ私はめつたに床をあげぬほど不精者なので、手際よく荷物をつ

くりあげるなどという芸当は生れつき不可能なのである。

私はカバンの蓋など開け、その中に幾冊かの書物と衣類をつめこんだが、それだけで疲れてしまい、すでに半分ほど飽きてしまい、果ては茫然としてマンガなど読みだす始末であった。しかるに航海の経験をもつ連中が現われて、いゝろんなことを言う。そのたびに私は、インド洋はさぞかし暑かろうと半ズボンなどをつめ、冬の北大西洋はさぞかし寒かろうと登山に使うヤッケなどを有するHが現われ、いいだ」といふふざけたペンネームを有するHが現われ、いいかね、山みたいな大波がくるぞ、コップでも何でも忽ち木っ端ミジンだ、などと大仰なことを言うので、私はわざわざ金属製のコップ、灰皿などを買ひこんだ。Aという心理学者で国際ゴロミたいな男が現われ、フカを機関銃で射つのは面白いぞと教えてくれたが、機関銃を買ひこむわけにはいかず、ただ彼が船中で飲むコーヒーのいかに美味であるかを力説するので、わざわざネスカフェーなど買ひに出かけた。その間、私はそれまでの勤務にカタをつけねばならず、船の検疫と予防接種に立会ったり、海運局で船員手帳を貰ったり、夜は夜で飲みに出かけなければならなかった。私は支度金をもらったので、カメラやナイロンシャツやボールペンなどを購入し、すっかり物持ちになり、荷作りは益々面倒なものになってきた。あまつさえMが現われ、

もつとこまごました日用品が大切だ、そんなもので向こうで金を使うのが一番つまらんぞと言うので、齒ブラシ、鼻紙など商売できるほど買ひこみ、ほとほと途方にくれ、こまごましたものなんて考えだせばキリがないから、しまいにはカンシヤクを起し、もう何がきたってこれ以上入れるものかという氣になった。

しかし彼等はなかなかいいことも言ってくれた。Mは、ミヤゲなんて買わずに一杯でも多く酒を飲めと言った。それからスケッチブックを持ってゆけとも言った。スケッチなどする閑はないだろうという、いやいや、長い航海ではのんびりスケッチなどしないと時間を持て余す、写真と違つてまた格別の味わいがある。私はなるほどと思い、画用紙と鉛筆を羊に食わせるほど買ひこんだが、結局一枚の絵も描きはしなかった。またAは、ミヤゲに風呂敷を持てゆくといいと言った。そんなものさらさら持つてゆくつもりはないと答えると、いやいや、外国の街を歩いていてひょっと思ひがけない親切を受けるときがある、御礼しようとしてもこっちには金がない、あつても金ではまずいことがある、そういうときにやるには絹の上等なものを買つてゆく必要はない、百貨店などでくれて使うにも始末に困る奴を集めてゆくがいい。私はなるほどと思い、貰ひ物の風呂敷を何枚か持参したが、これもちつとも効果的に使い

はしなかった。と言うのは、いざそれをあげたいと思う女の子などに会ったときにかぎり私は風呂敷を持ちあわせていなかったからである。私はけしからぬエジプトのパイロットなんかはそれを与える羽目になったり、思いがけず世話になった日本人のところに致し方なく置いてきたりした。そういう日本人のお宅では、ミヤゲに持ってきた風呂敷というからには恐らく上等のものと考え、あとで見ればデパートのマークなんぞあるのでさだめしアキれたらうと思うが、これは私の責任ではない。

辛うじて十一月十五日、出港の二時間前になって、私は行李とトランク二個をフウフウ言いながら船に運びこんだ。それをほぐしたり並べたりしていると早くも時間である。この三日間でクタクタの上に少し酔っぱらっている私には感慨なんて起りようがなかった。それでも無数のテープが潮風になびいて音を立てたときにはちょっといいものだなと思ったが、じきにこれは大変間の抜けたことであることがわかった。なぜなら曳船にひかれた船は容易なことでは岸壁から遠ざからず、その間見送り人も船の者もテープを抑えたり手をふったりしつづねばならぬので、終いにはすっかり手がぐたびれてしまうのである。いっそのこと、双方でロープかなにかをエイエイ曳きあい、敗けたほうがザンプと海に落ちこむことにしたらどんなものであろう。

ともあれ、こんなふうに私は、自分でもオヤオヤ思っているうち日本を離れてしまった、と人は思うだろうが、実はその翌日ちゃんと新宿の裏町を歩いていたのである。

船はその日の夕方千葉の館山に着き、ここで米を積みこむため一日半停泊することになった。館山に近づくころになると、船の非番の連中は汽車の時間を調べて帰宅の用意をはじめた。なかには家にほんのちょっと寄るだけですぐまた汽車に乗らねばならぬ遠距離の者もいる。そのくらい海で暮す人にとっては陸と家が貴重なものになっているのだらう。こんなところから帰ってゆくなどとは考えてもみなかったから、どうしたものかと迷っている私にむかつて主席航海士チーフ・ナヴィゲーターが言った。

「ドクター、海に出てしまおうね、あのときもう一晩昼の上で寝ておけばよかったとあとで思いますよ」

私はこの言葉に感心し、その夜おそくノコノコ東京に戻ってきた。翌日新宿をぶらつき、はじめてノンビリした気分になり、映画を見たりパチンコをやったりした。そうしている、なにか密入国でもしたみたい、へんに探った気分がつきまといってくる。なにぶん今度の航海はだしぬけに決ったのでごく一部のの人にしか知らせることができず、おまけに私はホラ吹きなので友人の大半は信用せず、ひどいことになるかと私が帰ってきてからも「マグロ船に乗ったそ

うだが本当か？ そちらに隠れてたのじゃないか」などと言われたが、事実は一日だけ余計日本にいたのである。

このとき私は誰にも戻ってきたことを知らせなかったけれど、Aにだけは或る用件を思いだして電話をかけた。電話口の向こうで、さすがにビックリしたような声が叫んだ。「なんだ？ もう逃げちゃったのか！」

これが海だ

今度こそ日本は本当に遠ざかって行つた。しかし、やはり感慨など起す閑はない。私は自分の荷物をようやく片づけ終り、隣の医務室の点検をはじめた。タイルの床には船が持つてゆくミヤゲ物の箱や薬品の箱が積みあげられ、大げさに言えば足の踏場もない。まだ何がどこにあるかも皆目わからない。医務室には一坪足らずの小部屋がついており、薬戸棚とベッドが一つあるが、そこもいろんな箱で一杯で、その間にこの船がハワイに行つたときのヤシの実がひとつ、もう茶色に乾からびてころがしてある。

大きな汽船はいざ知らず、航海中の船は相当に騒々しいものだ。殊に医務室は場所がわるく、エンジンとスクリユ

ーの響きがじかに伝わってきて、手術台はぶるぶる震え、ドアはひっきりなしにカタカタ鳴っている。小部屋のベッドは病人用のものだが、震動と噪音のため、こんな所に寝たら陸の病人ならたちまち悪化してしまいそうだ。私は戸棚の引出しを点検し、箱につまつた予想外に多い薬品を調べ、注射器やガーゼを消毒し終つてはじめて落着きをとりもどした。私のことをすべてデタラメな男と思う者があつたら豚に食われるであらう。そうしているうちに早くも幾人かが薬を貰いにきたが、船医なんてもうメチャクチャに閑であると聞かされていた私にはちよつと意外であつた。聞けば長い航海に出る前にはこれが最後と夜ふかししたり酒を飲んだりする者がいるので、腹くだしとか風邪ひきとか、出港の日には必ず病人が多いとのこと。

すでに夜になつていて、デッキに出てみると周囲は真暗である。船全体が意外に暗い。明るくしておくて視界が利かないため灯火はみな遮蔽してしまふからである。黒い海上を暗い船がゆつたりと上下しながらなかなか堂々と進んでいる。船首にかきわけられた波が白く泡立ち、湿っぽい風が耳元をすぎる。やがて、右手の水平線上にほそい三日月がかかり、ひとすじの銀光を黒い海面に流した。そうして潮風の匂いをかぎ、船体がゆつたりと傾き、のしあがり沈むのを感じていると、はじめて或る種の感動が私の胸に

湧きあがってきた。

翌日、次第にうねりが大きくなってきた。日本の方角は雲がたむろし、島があるようでないようで判然としない。

前甲板は完全に波に洗われている。船首に波がぶつかってくだけちると、それが無数のしぶきとなって船上を横ぎる。波は遠くの方は泥か粘土の造り物のように見え、近づくとつれて生きてのたくって躍っている。日が雲に隠れ、また現われ、それにつれて海面は刻々に変化する。その変化は千様であり、山のそれよりもっと素早く、また荒々しくとりとめなく、一定の規範を有しない。私はしぶきのこない船尾の甲板に出て、潮騒と風の唸りを聞き、溶岩のうねりのように湧き立つ波頭を長いこと見つめた。それは原始の溶鉱炉で、最初の生命がこの地球上に生じてきた場所にかにもふさわしく、重々しく鉛色に湧きかえっている。金具や索具に塩の結晶がこびりついており、指が塩っぽく特有のねっとりした感じになる。船室に戻ると、潮の香が身体全体に沁みついているのがはっきりとわかる。

私は今や広漠とした海の気をあびて大いに嬉しくなり、たちまちにして一つの詩のごときものをひねくりだした。

これは海だ
海というものだ

ああ その水は
塩分に満ちている

さすがに私はこの出来栄えには感服しなかったので、今度はもっと本物の詩を、悽愴なまでに美しいブレイズ・サンドラルスの詩の一節を口の中で呟いてみた。

血だらけのけものの体を

夕方

海辺づたいにひいてゆくのは このおれだ

おれが行くとき

波間から無数のタコが立ちあがる

夕日だ……

(なだ・いなだ訳)

サンドラルスは我国ではあまり知られていないが、これこそアタコロイノナの申し子みたいな男で、放浪に明けくれた彼の生涯自体が、すでにホメロスの巨大な作品なのである。彼が旅した無数の土地、彼が経験したすべての商売を書きならべただけで、それこそページも費やさねばならないので、ここではそんな真似はできないが、一八八七年バリーに生れた彼が最初にエジプトにいた父のところに旅したのは生後五日目のことだった。ニキビのできる

年頃になると変なマダムに花束を捧げたりなんぞばかりしているの、父にアパートの七階の部屋に幽閉されてしまったが、軽業師そのけにバルコニー伝いに脱出してしまいい、汽車に乗りこむと車中で会った変てこな行商人の相棒になり、ロシア、アルメニア、中国などを行商して歩いた。それ以来彼はもう家族の顔を見ないし定まった居住地をもったことがない。たとえばフランスで養蜂をやっているときにも二十八回転居をした。ロンドンのミュージックホールで手品をやっていたとき、同じ舞台でアルバイトにピエロ役をやっている医学生がおり、楽屋でショウペンハウエルなどを読みふけていたが、その名はチャーリー・チャップリンと言った。カナダではトラクターの運転手をやり、米国に渡るボーランド移民船で何回も大西洋を往復し、ニューヨークではルンペンをしながら図書館に通った。彼は、以前作った自分の詩がアポリネールによって剽竊（うせつ）されたりしても、てんで意に介しはしなかった。第一次大戦が始まると従軍し、兵士たちがどんな具合にオシッコをするのか、イビキと砲弾の関係とか、そんなことばかり観察していた。そのとき右手を失ってしまったが、ますます転々と職業を変え、ジブシーの群に投じたりアマゾンをさかのぼったり、もうあとは書くのも大儀である。

彼はこうした放浪の合間に発作的な勢いで作品を書いて

いるのだが、六十歳を迎えると、おれは自分が作家としての才能があることにいま気づいたと宣言し、なだ君によれば、最近も彼はとんでもないエネルギーで続々と新作を発表している由だ。いかにも彼らしいのは、どの本を見てもその著作目録の末尾には次の一行がつけ加えられていることである。「あと三十三冊準備中」

船に乗ることになったとき、やはり気になったのは船酔いのことである。果して自分が船に強いのか弱いのか全然わからない。六〇〇トンの船では相当揺れるものと覚悟せねばなるまいが、ドクターが真先にぶっ倒れてくたばってしまったのはあまり見つともよい図ではない。そこで昔海軍の軍医であった知人に電話を試みた。

「いやあ、それはやっぱりやられますよ。私なんか最初のうちはベッドの傍にドラム罐を持ってこさせて吐き通してしたよ」

これはイカンと私は思い、もう一人、これは空母に乗って真珠湾などに行った親戚の者に訊いてみた。

「大きな空母で平気になっててもね、また小さな駆逐艦なんかに移るとやられるね」

その小さな駆逐艦とはどのくらいかと訊くと二千トンとのこと、こいつはますますイカンと私は考えた。